

いでであった。この調査によって日本ホーリネス教団の現在の礼拝様式がどのようなものであるか、だいぶ明らかになった。それによると

- I 一、聖餐式を全く行なっていない教会が、四教会。
 - 二、クリスマス等、年に数回行なっている教会（隔月という教会もある）が、五三教会（五五％）。
 - 三、毎月一回行なっている教会が、四〇教会（四一％）。
 - 四、毎週行なっている教会は、一つもなかった。
 - 一と三を合わせると、九三教会（九六％）が聖餐式を行なっている。
 - II 聖餐式を行なわない礼拝でも、会堂に聖餐卓を、常においている教会は、三五教会（三六％）。
 - III 一、礼拝を、式文によって行なっている教会は、三教会。

電話で問い合わせたところ、ある教会は、日本基督教団の式文を使用しているとのことであった。また他の教会は、牧師の手作りの式文によるとのことであった。もう一つの教会は、教会名が書いてなかった。なので、調べる事ができなかった。
 - 二、聖餐式、結婚式等で式文を使用している教会は、九二教会（九五％）。
 - IV 一、毎週礼拝で、牧師がガウンを着用している教会は、六教会（六％）。
 - 二、イースターとか結婚式等に、ガウンを着用する教会は、二五教会。
 - 三、結婚式とか葬式にのみ、ガウンを着用する教会は、四四教会。
 - 四、ガウンを全く着用しない教会は、二二教会（二三％）。
- なんらかの場合にガウンを着用する教会は全部で、七五教会（七七％）。

- V 一、礼拝について、信徒に指導をしている教会は、五三教会（五五％）。
- 二、礼拝の意味を求道者に教えている教会は、八六教会（八九％）。
- 三、そういう指導を全くしていない教会は、十教会（一〇％）。
- VI 一、礼拝のプログラムをもっている教会は、九七教会（一〇〇％）。
- 戦前のホーリネス教会のことを考えると、時の流れを感じる。
- 二、交読文を使用している教会は、九一教会（九四％）。
- 三、信仰告白に使徒信条を使用している教会は、九二教会（九五％）。
- 四、招詞をいれている教会は、三三教会（三四％）。
- 五、罪の告白、懺悔のプログラムのある教会は、一一教会（一一％）。

アンケートを整理していて、日本ホーリネス教団の典礼化が、筆者が考えていた以上に、戦後急速に進んでいることがわかった。

五、ホーリネス教会の礼拝の神学

ここで、筆者の私見ではあるが、礼拝の神学にふれておきたいと思う。

礼拝の意味

礼拝とは、人間が超越者なる神に近づき、神と出会い、そして、その聖なる神の前にひれ伏して、拝み、誉めたたえることだといえる。

しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである。V
(ヨハネ四：二三、二四)

ここで礼拝と訳された言葉 (*proskuneō*) は、「拝む」という意味のコトバである。礼拝とはなによりもまず神を拝むことだと、聖書は主張する。神をまことに神とすることであり、神が崇められ誉められたえられることだと言わねばならない。礼拝が神を拝むことだという素朴な意味が失われているところに、われわれの問題があるのでないか。

ヘブル語においても、礼拝を意味するシアーハーは、文字どおり、身をかがめ、頭をたれ、ひざまずいたり、地に伏して畏敬の念をあらわす身体的な動作を意味するコトバである(詩二九：二参照)。

この神を拝むという素朴な意味が、今日、礼拝から失われていると言われている。プロテスタントの礼拝は、まるで学校か講演会のようになった、と言われる。⁽⁹⁾

神社やお寺には、お参りに行く、と言う。「お参り」とは、「拝む」という意味の謙讓語である。しかし、教会にお参りに行くというのは、どうもしっくりいかない。教会には、説教を聞きに行くという言い方のほうが、ぴった

りする。それほどプロテスタント教会の場合、話を聞くことが礼拝の中心になっているのだと思う。たしかにプロテスタントの礼拝の中心は、み言葉の説教である。お寺や神社のように、お線香をあげたり拍手を打ったりすることが中心なのではない。しかし、み言葉の説教を聴いて、それに信仰もって応答することをとおして、神を拝むのである。説教を聞くことだけが強調されて、信仰的に応答するとか、神を拝むということが、充分に教えられていないために、教会に行くとは、話を聞くことだというような誤解を与えてしまっているのではないだろうか。

礼拝とはいっても、ただ説教を聞きに来るだけで、神を拝むという気持ちが乏しいように思える。だから、説教が分かったとか、恵まれたとか、そういう個人的、人間中心のことだけが問題になる。礼拝に遅刻しても、なんとも思わないのである。説教を聞きに来るだけなら、説教に間に合うように、出席すれば良いわけである。説教を聞くだけなら、未信者でも聞く。霊と真をもって礼拝して、初めて神を礼拝したといえる。

礼拝を成立させるもの

a キリストの現臨

神が礼拝の場におられなければ、礼拝にはならない。神がおおいでにならないような集会は、単なるキリスト教講演会にすぎない。

人間が超越者なる神に出会い、その神を拝むということがおこってくるためには、礼拝の場に神が現実におられなくては、礼拝は成立しない。それを神の現臨という。神が現実存在される、という意味である。

むかし、「宮城遥拝」というコトバがあった。いまの人はあまり知らないようだが、遥かに拝む、という意味である。戦争中、強制的に宮城の方向にむかって、最敬礼をさせられたのだ。(当時日本では、天皇陛下は現身神(アラ

ヒトガミ)であると教育されていた。) 拝まれる天皇がそこにおられるわけではない。遙か遠くにおられる。キリスト者が神を礼拝するのは、そのような仕方ではない。われわれは礼拝において、じつに聖なる神のみに立たされると言ってもよい。

△わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから▽
(イザヤ六六：五)

イザヤが礼拝において、聖なる神のみに立たされたように、われわれも礼拝において、聖なる神のみに立つのである。

ではどういふふうによりキリストの現臨をあらわすかという点、伝統的に教会は二つのことによりキリストの現臨を表現してきた。一つは聖餐による方法であり、他はみ言葉の説教による方法である。

b 聖餐式とキリストの現臨

歴史的にいっても、礼拝は聖餐式から始まったといわれる。原始教会における礼拝とは、「パンさき」とか、ユーカーリスト(感謝)と呼ばれるものからはじまった。

使徒行伝には、礼拝というコトバ(προσκυνεω)は、四回しか使われていない(七・四三、八・二七、一〇・二五、二四・一一)。しかも、これらはキリスト教会の礼拝の意味では、使われていない。それらはユダヤ教の礼拝や、人に敬意を表す意味で使用されている。そして使徒行伝では、礼拝というコトバが使われるべきところに、△パンさき▽というコトバが使われていることが多い。

△週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、……▽

(使徒二〇：七)

△週の初めの日に▽パンをさくために集まったという記事は、この日にキリスト者たちが礼拝のため集まる習慣をもっていたことを示す。現存の最古の明瞭な証拠であると、F・F・ブルースは述べている。¹⁰⁰ 原始教会のキリスト者にとっては、礼拝とはパンさき(聖餐式)だったのである。そういう伝統をカトリック教会やギリシヤ正教会、またリタージカルなプロテスタント教会は、受け継ぎ大事にしている。

ホーリネス教会のルーツである初期のメソジストもそうであった。改心前のウエスレーの礼拝に関する考え方は、きわめてハイチャーチ的であったといわれる。改心後も、彼は礼拝観をかえる必要を認めなかった。メソジスト派の礼拝観は、一七八四年に、ウエスレーが北米のメソジスト教会に書き送った主日礼拝プランにもとづいている。

これは一六六二年版の英国国教会の祈禱書を、ウエスレーが改訂したものだ。メソジストの会員は毎週聖餐式にあらずかり、そのために学生仲間から「礼典主義者」と呼ばれたほどである。¹⁰¹

聖餐式に関する考え方

今日聖餐式に関する考え方に、主なものが四つあると思う。その一つはツイングリの説で「記念説」といわれる。△わたしを記念するため▽ (ルカ二二・一九) というイエスの言葉をその根拠とする。しかし、聖餐式を単に「記

念」とか「想起」とすることは、聖餐式を人間の所業とすることであつて、認めがたい。聖餐式において本質的に重要なことは、われわれに対する神の行為である。聖霊が礼拝のなかに働かれることだと言わねばならない。

次にカトリック教会の「化体説」がある。これは主イエスの「わたしの体である」という言葉を根拠に、司祭が祝福の祈りをする時、奇跡的にパンはキリストの体に、ぶどう酒はキリストの血になる、とする説である。この考え方は、かなり古い時代からある。カルヴァンは、これは物的要素の偶像化がおこるとして反対した。

ルターは、パンはパンのままであり、ぶどう酒はぶどう酒のままであるが、そこに何らかの意味において、キリストの体と血とが、パンとぶどう酒の中に、それと共にいますということを信じた。これを「共在説」という。

それに対してカルヴァンは、パンとぶどう酒の中にはなくて、聖餐式全体の中に、キリストが臨在されるとした。ウエスレーは、聖餐式によつて聖霊の恵みが、すべての神の子らに注がれる最大の通路であるとし、カルヴァンに近い立場をとっている。

この三者の考え方は、細かい点では異なるが、大切なことを共に主張している。それは何らかの意味において、主イエス・キリストが、聖餐式の中に現臨しておられることである。¹⁰ 礼拝において聖餐式が不可欠であるという意味は、実にここにあると言つてよいと思う。聖餐式を行うことにより、礼拝の中にイエス・キリストが現臨されるからである。

原始教会から今日にいたるまで、聖餐式はさまざまの形をとつて発展してきた。しかし、その根本的真理は変わらない。礼拝と、聖書研究会やキリスト教講演会との違いがここにある。どの集会にも聖書についての話があり、賛美や祈りがある。その点ではなんら異なるところはない。礼拝と他の集会とが本質的に異なるのは、礼拝には神の現臨があるという点である。聖書研究会やキリスト教講演会に、神がおいでにならないとは思わない。神はどこ

にでもおられる。しかし、神の遍在とは別な意味で、神が特別にご臨在を顕してくださる場所というのがある。

荒野を旅しているイスラエルの民に、神は常に共にいてくださった。しかし、特に神の幕屋の至聖所の中の契約の箱に、神は臨在を顕してくださった。

「わたしはその所（祭壇）であなたに会い、あなたと語るであろう。またその所でわたしはイスラエルの人々に会うであろう。幕屋はわたしの栄光によつて聖別されるであろう」

（出エジプト二九・四二、四三）

荒野を旅行中のイスラエルの民にとつて、雲の柱、火の柱と共に、契約の箱は神の臨在のシンボルであつた。

今日の教会にとつて、その契約の箱に相当するものが祭壇（聖餐卓）である。礼拝に聖餐式が欠かせないのはその意味だと考えられる。リタージュカルな教会は、聖餐式の行なわれない礼拝であつても、聖餐卓は常に会堂に置いてある。たとえ聖餐式が行なわれない礼拝であつても、礼拝者は、主のテーブルに招かれた者として礼拝をする。そのため礼拝堂には説教壇とともに、聖餐卓は常に置かれているのである。

今日のプロテスタント教会の中には、宗教改革において礼拝における大切なものまで捨ててしまったのではないか、という反省がある。「礼拝は、福音派が失った宝だ」とさえ言われる。また「福音派は、伝道、教育、交わりなどの点においては強い。しかし、礼拝は、福音派の教会の最も弱い部分である」¹¹とも言われる。宗教改革、またピューリタン革命において、教会の内部の腐敗を取り除こうとして、大切なものまで捨ててしまったのではないか。一部の教会の礼拝は、もはや礼拝とは呼べないような礼拝になってしまったと見る者もある。¹² そこから改革派

教会はもちろん、ピューリタンの流れをくむ組合教会まで、宗教改革において一度捨てたリタージュカルなものを回復しつつあるのが現状である。プロテスタント教会でも、毎週聖餐式を行う教会があるし、リタージュカルな教会では、月に一度聖餐式を守っているのがごく普通である。ルーテル教会のように、教会歴によって礼拝を守っているところもある。

聖餐式を単に行なうだけでなく、なぜ聖餐式を行なわねばならないのか、その意味についても神学的に考え直すべき時であると思う。同時に信徒に聖餐式の意味と、守り方について教えることが必要だとも言える。

六、ホーリネス教会の礼拝の革新

戦前、戦後のホーリネス教会の礼拝と、今日のホーリネス教会のそれを比べてみると、かなり変わってきている。リタージュカルとまでは言えないにしても、確かにホーリネス教会の礼拝は変わってきた。

一九八七年九月七日から三日間、秩父の埼玉県青少年野外活動センターにおいて、三十名ほどの教職が集まり、「東日本教職セミナー」が行なわれた。「命あふれる礼拝」というテーマで、筆者は礼拝論を発表した。その他、参加者の発表や討論の時もあった。参加者の発表を聞いてみると、礼拝に関心はかなり高まってきていることが分かった。使徒信条や交読文の使用は当たり前であり、月に一回聖餐式を守っている教会もかなりできてきている。しかし、試行錯誤をしているのか、礼拝のプログラムにかなりのばらつきがみられ、なかにはカトリックの模倣かと思われるものもあった。礼拝に関してまだ統一した考え方はないようだ。しかし、ほとんどの教会が週報を発行し、それには礼拝のプログラムが載っている。そしてほとんどの教会が礼拝において交読文を唱え、使徒信条を信

仰告白に使用している。教団の中に、礼拝学に関心をもって一人でこつこつ研究している教職が少なからずいることを知った。ホーリネス教団が公的に礼拝学を学びあう場をもったということは、おそらく初めてであり画期的なことであったと思う。

今後のホーリネス教会の礼拝は、どのようにあるべきであろうか。時代と共にホーリネス教会の礼拝に関する考え方も、当然変わってくると思う。そして事実変わってきている。しかし、どんなに礼拝の様式を変えるにしても、伝道的なスピリットは失ってはほしくない。

欧米の教会と違って、日本の教会の礼拝には、常に新しい求道者が出席している。その人たちは聖書についてもキリスト教についてもほとんど知識がない。教会はいつもこれらの求道者のことを配慮していかなければならない。そのために、プログラムもその人たちのことを考慮したものが必要であろう。礼拝において伝道的説教をすることも必要であろう。純粹にクリスチャンのことだけを考えて、欧米のようなリタージュカルな礼拝を守ることには、無理があるし、それでは教会は衰退していく。それは教会の歴史の証明するところであると言える。

W・H・ウイリモンは次のように言っている。

「聖日礼拝は、変えてはならないものと多くの人が考えてきた。しかし、ほとんどのプロテスタント教会はもちろん、第二バチカン公会議以来ローマカトリックも、ここ数十年の間に大きく変化してきた。それは過去四百年間になし遂げた変化をはるかにこえるものである。」¹⁵

礼拝を改革していくためには、礼拝についての、みことばに基づいたしっかりした礼拝の神学をもたなくてはな

らない。そうでないと時代に押し流されてしまう。礼拝という名前で呼べば、その集会が礼拝になるのでは決してない。礼拝と呼べるような内容と形がなくてはならない。そのためには神のことはである聖書に基づいた神学が必要であろう。

あとがき

日本ホーリネス教団では、二年ほど前から、毎年五人の牧師に、それぞれ関心のあるテーマにしたがって研究論文を書かせて、発表させている。筆者も、多年礼拝学に関心があったので、それをまとめて今年それを発表した。それがある人の目にとまって、日本福音主義神学会の雑誌に、ホーリネス教会の礼拝について書くように、勧めてくださったのである。そこで、その論文の中のホーリネス教会の礼拝について書いた部分を、多少なおして、ここに掲載させていただいた。

いままでホーリネス教会の礼拝について、あまり歴史的なことは書かれてこなかった。したがって、参考にする本もほとんどなかった。『中田重治伝』にも、礼拝については何もふれていない。ただ、土肥昭夫氏の『日本プロテスタントキリスト教史』（新教出版社）を読んでいて、それがヒントになって、ホーリネス教会の礼拝のルーツが、十九世紀のリバイバル運動にあることを思いついた。だいたい間違っていないと思う。そう考えてくると、もつれた糸がとけるように、ホーリネス教会の礼拝が、なぜあのように自由で形式にとられない礼拝をしてきたのか、分かるようになった。

不十分とは思いますが、ホーリネス教会の礼拝の紹介にはなるのではないかと思う。

注

- (1) 東京神学大学、『神学』第四一号（礼拝論）六頁。
- (2) R.M. Spielmann, *History of Christian Worship*, p.82.
- (3) 『キリスト教礼拝辞典』三二二頁、由木康『礼拝学概論』一六一頁。
- (4) Spielmann, *Ibid.*, p.83.
- (5) 亀谷凌雲『仏教からキリスト教へ』（福音館書店、一九七三年）一五九頁。
- (6) 由木康『礼拝学概論』九頁。
- (7) 『神学』前掲書、十頁。
- (8) 『神学』四頁。
- (9) Robert L.Cate, *Old Testament Roots For New Testament Faith*, p.235.
- (10) 竹森満佐一『礼拝』（東京神学大学）五頁。
- (11) F.F.ブルース『使徒行伝』（新教出版社、一九五八年）四四〇頁。
- (12) J.G.Davice, *A New Dictionary Of Liturgy & Worship* p.331.
- (13) 『キリスト教礼拝辞典』三四八頁。
- (14) ウィルヘルム・ニーセル『福音と諸教会』（改革社）三二二―三三六頁。
- (15) Ronald Allen, Gordon Borrer, *Worship: Rediscovering the Missing Jewel*, p.77.
- (16) Robert E. Webber, *Worship Old & New*, p.12.
- (17) William H. Willimon, *Word, Water, Wine and Bread*, p.5.

参考文献

- 『キリスト教礼拝辞典』（日本基督教団出版局、一九七七年）。
- 『キリスト教史』十一巻（講談社、一九九〇年）。
- W.V.レーヴェニヒ『教会史概論』（日本基督教団出版局、一九八三年）。

- H・R・ホーア『初代教会史』(教文館、一九七七年)。
 七肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』(新教出版社、一九八七年)。
 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』(燦葉出版社、一九八三年)。
 東京神学大学編『礼拝論』、『神学』四一号(東京神学大学神学会、一九七九年)。
 レイモンド・アバ『礼拝、—その本質と実際—』(日本基督教団出版局、一九六一年)。
 由木康『礼拝学概論』(新教出版社、一九六一年)。
 ルター『ルター著作集』第一集、五(聖文舎、一九八一年)。
 ウァイター『ルターの礼拝の神学』(聖文舎、一九六九年)。
 シェパード『教会の礼拝』(日本聖公会出版部、一九六六年)。
 上屋吉正『典礼の刷新』(オリエンズ宗教研究所、一九九〇年)。
 柏井園『キリスト教史』(新教出版社、一九六一年)。
 ウイリントン・ウォーカー『キリスト教史』四卷(ヨルダン社、一九九〇年)。
 東京神学大学編『礼拝論』(東京神学大学出版委員会、一九八一年)。
 竹森満佐一『礼拝』(東京神学大学出版委員会、一九七二年)。
 東京神学大学編『洗礼と聖餐』、『神学』四七号(東京神学大学神学会、一九八五年)。
 J・エレンミアス『イエスの聖餐のことば』(日本基督教団出版局、一九七四年)。
 日本基督教団宣教研究所編『聖餐』(日本基督教団出版局、一九八八年)。
 野村誠『J・ウエスレーによる聖餐論』(シオン書房、一九八九年)。
 日本基督教団編『洗礼・聖餐・職務』(日本基督教団出版局、一九九〇年)。
 J・A・エンズマン『ミサ』(オリエンズ宗教研究所、一九九二年)。
 エール・ジュネル『ミサきのうきょう』(ドン・ボスコ社、一九八九年)。
 土屋吉正『ミサがわかる』(オリエンズ宗教研究所、一九九〇年)。
 Ronald Allen, Gordon Borrer, *Worship: Rediscovering the Missing Jewel* (Oregon: Multomah Press, 1982)

- Robert L.Cate, *Old Testament Roots for New Testament Faith* (USA: Broadman Press, 1982)
 J.G.Davies, *A New Dictionary of Liturgy & Worship* (London: SCM PREEFS, 1986)
 Dom Gregory Dix, *The Shape of The Liturgy* (San Francisco: Seabury Press, 1982)
 Richard M.Spielmann, *History of Christian Worship* (New York: Seabury Press, 1966)
 Robert E.Webber, *Worship, Old and New* (Michigan: Zondervan, 1982)
 William H.Willimon, *Word, Water, Wine and Bread* (USA: Judson Press, 1980)